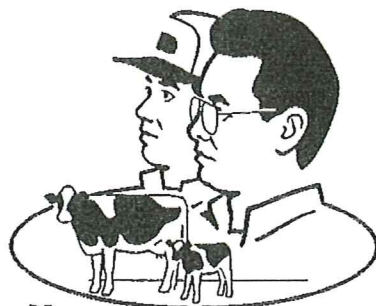


マネージメント情報

2009 年 8 月



Total Herd Management Service

この記事は、機関誌や日常の出来事の中からわれわれが注目した話題を皆様に提供するものです。
ご質問、ご要望などなんでもお寄せくだされば、今後テーマとして取り上げたいと思います。

1. おがくずの大腸菌（群）とその清浄化

前回は、新鮮で一見いかにもきれいなオガクズが大腸菌（群）によって汚染され、その数が危険域である 100 万個(CFU)/g 以上になっているものが非常に多いことを報告しました。今回は、それらのおがくずへ石灰を混ぜ合わせることによってどれだけ、この大腸菌（群）を減らすことができるかをやってみました。

写真1：2のほうは、新鮮なおがくずの大腸菌（群）数を示しています。

2-1(サンプル2の1万倍という意味)と2-2(サンプル2の10万倍)の検査からこのオガクズは、およそ50-100万/g くらいの汚染度であることがわかります。

1-1はこのおがくずに1立米(1立方メートル)当たり、およそ15kgの消石灰を混ぜ込みました。ほとんどの大腸菌群が死滅あるいは活力をうしなっていることがわかります。

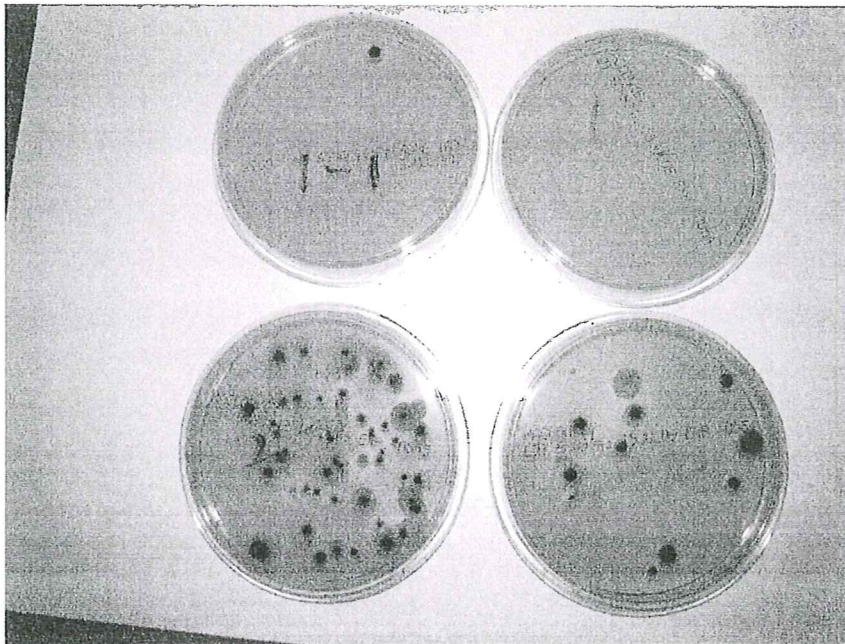


写真1

写真2も別のサンプルのもので、前回みせたサンプルで、3-2（10万倍）と4-2（10万倍）ですので、サンプル3では約200万個/g、サンプル4では、おそらく1億個以上の大腸菌（群）があるものでどちらも非常に危険なオガクズです。

しかし、どうようにこれらに上と同じ量（割合）の消石灰を混ぜ込んだものです。そのリスクが消え去っているのがわかります。このように消石灰を十分に混ぜ込むことによって大腸菌（群）のリスクを大幅に低減できます。また、このくらいの量を混ぜ込むと乳頭のアレが気になるところですが、今のところ問題はないようです。4 トンダンプ 1 台に 300kg 以上もの消石灰を混ぜ込むと、オガクズがあざやかな黄色に変色するのが観察されます。

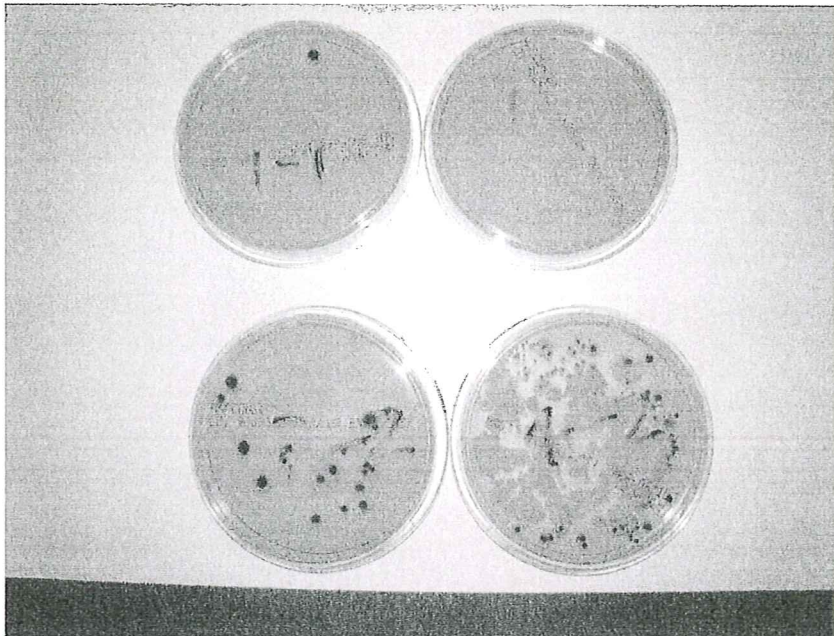


写真 2

また、現場でこれだけの消石灰を混ぜ込むのは大変ですし、気管などに吸入しないようマスクなどの装着が望まれます。オガクズを作っている工場でこの消石灰を混入をしてくれるところもありますので、詳しく知りたい方（要望のある方）は連絡ください。

2. ボランティアウエイティングペリオド（VWP 自発的待機期間）

VWPをどうモニターすべきかを例をあげて説明してきましたが、これまでの説明はすべて、牛群全体を一纏めにしたのですが、これらをさらに産次別で観察するのも時に有効になりますし、DC305 ではそれが簡単に調べることができます。図 1 は、同じ農場の搾乳日数ごとの妊娠率を示していますが、その授精頭数と受胎頭数からその受胎率を計算しました。搾乳日数 40-80 日での受胎率が全体的に低くなっていますが、特に 2 産群で低くなっているのが気になるところです。

受胎率

	DIM	Br Elig	Bred	Pct	Pg Elig	Preg	Pct	Aborts	
初産	50	65	15	23	65	4	6	1	4/15=25%
	71	62	15	24	62	5	8	1	5/15=33.3%
	92	56	33	59	56	18	32	2	
	113	38	26	68	38	10	26	1	
	134	28	14	50	28	7	25	1	
2産	50	49	12	24	49	2	4	0	2/12=16.6%
	71	48	16	33	48	3	6	0	3/16=18.7%
	92	42	23	55	42	9	21	1	
	113	35	19	54	35	5	14	1	
	134	29	21	72	29	10	34	0	
3産 以上	50	88	21	24	88	6	7	1	6/21=28.6%
	71	78	36	46	78	10	13	1	10/36=27.8%
	92	68	37	54	68	19	28	0	
	113	48	24	50	46	12	26	0	
	134	29	15	52	27	8	30	0	

図 1

何回かにわけて VWP についてどう考えるかを示してきました。しかし注意しなければならないことは、VWP の決定が繁殖成績に与える影響は、栄養・周産期・安楽性などの管理に勝るほどの重要性はありません。(写真3)

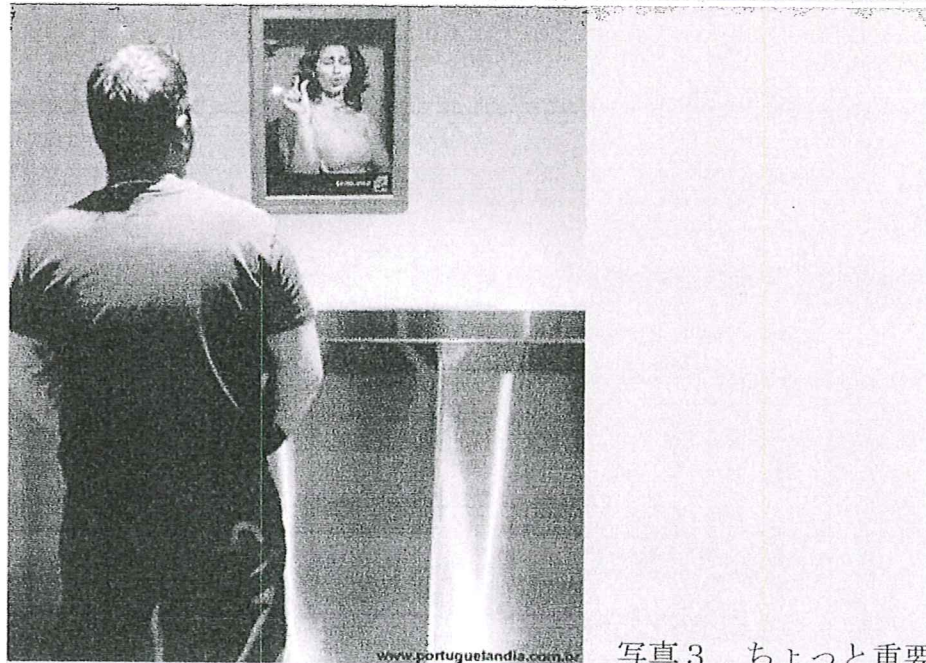


写真3 ちょっと重要

しかし、より綿密高度に農場の繁殖を考えるときには必ず考慮しなければならないものだと思います。

VWPの決定とその意義

- 1) VWP が明確でなく、平均授精開始日が漠然と遅れることは、大変な損害になっています。
- 2) VWP を遅らせることは、その後の受胎率や妊娠率が明確に上がることが求められます。スタートの遅れを取り戻すには、その後のスピードアップが前提になるからです。VWP の遅れは、その分リスクの重みが増すことを理解していなければなりません。
- 3) VWP の決定や変更をするためには、DIM の推移による受胎率・妊娠率などを必ずモニターしなければなりません。検診とそれをモニターできるプログラムが重要になります。
- 4) 初回授精からシステマティックなプログラムを採用しているところは、薬剤や労働コストそして、それに伴うパフォーマンスを検証することが必要で、Tenhagen らの VWP 延長の報告は、興味深いものです。
- 5) VWP の決定は、農場ごと、産次ごと、季節ごと（特に暑熱期）、そして個体ごとの柔軟な対応が時に必要になります。
- 6) VWP を決定したら、その後 21・25 日以内にすべての牛が初回授精を受けていることがゴールになります。VWP の決定はその意思表示でもあるのです。
- 7) 一般に VWP が 40・50 日でも高い受胎率や妊娠率を示している農場が、結果としてよりよい繁殖パフォーマンスを示しています。それらの結果は、栄養・周産期・安産性などの管理に基づくものだと思います。

(VWP に関するこれまでの記事はデーリージャパン 9 月号に掲載予定です)

3. トータルハードマネージメントサービスからのお知らせ

1) 有限会社から株式会社へ

会社法の変更から、実質株式会社でありました THMS ですが、その名称も、株式会社へ変更します。8 月 1 日付であります。請求書あるいは振込に関して 8 月中は、有) トータルハードマネージメントサービスのままで OK です。

2) 佐竹獣医師を副社長へ

会社の将来的・継続的存続と成長を促すため、佐竹氏にその重責を担ってもらうことにいたしました。当社のロートル（老頭児：注 1）3 人（黒崎、山下、阿倍）が、相談して決めました。どうぞよろしくお引き回し頂けますようお願いいたします。

（注：中国語で老人・年寄りの意）

黒 崎